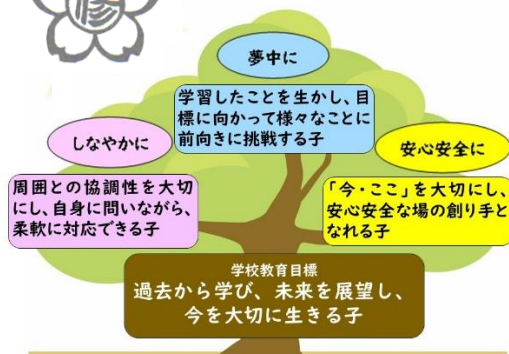




たくさんの「笑顔」「夢」「ありがとう」が集まる学校

令和8年 7月21日
京都市立修学院小学校
校長 鎌田 賢二



校長室だより「こころ」NO.49

多面的な関わりが、子どもの可能性を「広げ」「深める」

前回に続き、保護者の皆様からいただいた大切な問いにお答えします。今回お答えするのは、「チーム担任制で複数（広く）で子どもを見るようになると、一人一人の子どもの成長をじっくり、継続的に『深めていく』ことができるのだろうか」という、学びの本質に迫るご質問です。

お便りをくださった保護者の方は、「広く見ることと、深く見ることの両立ができるのでしょうか」と言葉が続けてくださいました。まさにその通りで、学校が「広く浅く」子どもを見るようになってしまっただけでは、何のための改革が分かりません。

ここで、子どもの成長における「広がる」と「深まる」についての考えをお伝えさせてください。子どもを「深めていく」の主語は、教職員ではなく、どこまでも子ども自身です。小学校の6年間という時間の中で、子ども自身が自分の世界を「広げ」、内面や人間性を「深めていく」ことこそが教育の本質です。

私たちが進める「チーム担任制」は、子どもの成長を「広げ」「深める」ために、あえて多面的・多角的な大人の眼（関わり）を子どもたちに届ける仕組みです。

一人の担任と子どもがじっくり向き合う時間も大事な基盤です。しかし、一人の大人の眼だけでは、子どもの「ある一面」しか引き出せないことがあります。しかし、個性の異なる複数の教職員が関わると、子どもの中にある多様な可能性を先生が引き出すのではなく、子ども自身が先生に合わせることなく自分らしい姿として発出できる「場」を豊かにしていくことができるのです。

◎A先生の「問いかけ」によって、新しいことに興味を持つ。（興味広がる）

◎B先生の「共感」によって、「失敗しても大丈夫！」と安心して自分を見つめる。（自己理解が深まる）

◎C先生の「褒め言葉」によって、意外な自分の強みに自信を持つ。（自信が深まる）

このように、多様な大人との関わり（グラデーション）があるからこそ、子どもたちの可能性は「広がり」ます。そして、「この先生には学習の相談、あの先生には休み時間の楽しいおしゃべり」と、子ども自身が安心して関わりを選べる環境の中でこそ、子どもたちの心は安定し、しなやかに「深まって」いくのです。

学年の先生たちが集まるミーティングで、「Aさん、最近こういう場面で新しい表情を見せてくれたよ」「じゃあ、次はこういう角度から声をかけて、さらに良いところを引き出してみよう」と、情報を重ね合わせています。それは、教員が子どもを「管理する」ためではなく、子ども自身が自らの力で根を深く張り、枝葉を広く伸ばしていくための、最適な『土壌』をチームで耕し続けるためです。あたたかいこれまでのアプローチを基盤としながら、チームによる重層的なアプローチへ。お子さんたちが「しなやかに夢中に安心安全に」その可能性を広げ、深めていける学校を目指してまいります。

我々大人も見方考え方を広げていくことでより深く見るができるようにしたいものです。



どんなときに子どもの深まりを感じますか？